

郵便による蝶交換をしていた下諏訪市の津田進さんから、直接来ないかという誘いがあった、1962年8月、初めて単独での高知市から県外旅行をする。ちょうどジェリー藤尾が歌う「遠くへ行きたい」がはやっていて、高松から宇野までの連絡船上で自然にこの歌をくちずさむ、そんな思い出の旅であった。

一日目は七島八島高原を案内してもらおう。スジボソヤマキチョウが多く、路傍の花々のどこに群れ飛んでいる。一番うれしかったのが、初めて目にするクジャクチョウで、歩道上の湿り気を求めて、まるできれいではない裏面の黒だけが目立つ体勢で、10頭以上があちこちで夢中になって吸水している。たまたま足膝の外科的手術をして入院治療を余儀なくされていた弟の好夫にもみせてやろうと、生きたまま持ち帰ったりもした。どこの場所だったのかは分からないが、眼下に広がる草原を見下ろせるところに二人で座り込み、歓談していたところに黒っぽいタテハチョウと思われる影が流れるようにあらわれて、そのまま頭上を飛び去っていく。津田さんは「キベリタテハですよ」と、なんでもないのでいうけれど、当方は高知大学の農学博士、小島圭三先生が高知市大丸百貨店に、完品のキベリタテハをずらりと並べた標本箱を展示していたのを食い入るように眺めたのが実物との初対面であって、せめてははっきりとキベリタテハだとわかる状態で現れて欲しかったと、飛び去った方角を呆然と眺めるだけ。高校生までずっと高知市中心の活動で、ルリタテハのとりわけ秋型が最も好きなチョウであったが、実物を標本として見て以降、なんとしても自分の手でキベリタテハを手にしてみたいと、出会いたいチョウの筆頭となっていた。この日は落合バス停近くの溪流堰堤部分でミヤマカラスアゲハの集団吸水場面もみせてもらい、一度集団が逸散したあとでも、罔として1頭でも羽を広げて水場に静置しておく、1頭、2頭と集まってきてやがて集団吸水状態が再現されることを目の当たりにして感心したものだ。津田さんは下諏訪の大鵬だと自称するりっぱな体格の青年で、家路までに好んで歌ってくれたのがデュークエイセスの「一番星はどんな星」。正調テナー音域の歌で、津田さんはこの歌が大好きらしくとてもきれいな声で歌ってくれた。歌詞の内容は目の見えない人のつらい日々の生活心情がひしひしと伝わってくる哀調歌で、この歌を愛するという津田さんがいかに優しい心の持ち主かがよくわかる。

翌日は茅野駅前から八ヶ岳登山口までバスに乗り、そこから本格的な登り道へと進んでいく。高知で1400mの梶が森への登山が唯一の経験であるが信州八ヶ岳への登りで、どんなチョウに出会えるのだろうかという期待感いっぱい急坂も苦にならない。途中の路面で日向ぼっこをしていたクジャクチョウが驚いて飛び立つのは、高知でいえばルリタテハでよくみる光景だ。津田さんが雪解け水の流れ落ちるところでその冷たさを体験させてくれる。どれだけ時間を要したのかの記憶が薄い、やがてクロユリ平を経て中山峠を



いくらか越えた場所で登山道を右に外れた道なきダケカンバの林へと踏み込む。樹林帯を横切るように進むと、赤岳の斜面だと思われるかなり傾斜のきつい明るい大草原に出る。あたりは一面花畑がひろがり、ベニヒカゲとクモマベニヒカゲがまさに乱舞している。クモマベニヒカゲは裏面の白条紋がとてもきれいでいかにも高山チョウの風格がある。シータテハやエルタテハもここで初めて普通種とを感じるばかりの個体数を体験。エルタテハは前日、七島八島から落合まで林道を歩いて下る途中、滑空中を野鳥に捕獲されてしまう瞬間を目撃したが、実物を確実に目にできたのが中山峠での初採集個体だ。

津田さんのお宅で二泊お世話になったあいだに、それまで好きではなかった牛レバーをこんがり焼いた料理として出してくださり、以降レバーが大好きとなるなど、津田さんのお母さんには本当によくしていただいた。白い飼猫がいて、筆者の寝床にやってきてずっと足元で寝てくれたことも思い出す。

1977年8月28-29日 新鹿沢温泉、湯の丸高原地蔵峠。湯の丸高原地蔵峠 11:50 着。霧が流れて涼しい。バスは小休止後、峠を下って温泉に向う。最初のカーブのところにベニヒカゲの姿が見える。アザミの花にきているらしい。右手に見える谷筋草原にもいくつか見る。しかし霧がいつそう深く、日差しはまったくなし。ベニヒカゲもその飛び方が弱々しい。さらに進むにつれて霧が濃くなり、バスのフロントガラスが濡れ始める。ついにはワイパーも作動。新鹿沢国民休暇村入り口につく頃にはもう雨。弱いのが確かに雨だ。ショック。時に 12:15。定刻より 14 分早い到着だ。峠に戻ろう。そして、せめてベニヒカゲでも採ろう。



小諸行き 13 時のバスで再び峠へ。霧が少し残っているものの峠一帯に雨はなく、ときおり日差しも見られる。峠を新鹿沢温

泉側へと少しもどるともうベニヒカゲが姿をあらわす。新鮮個体を確かめて採る。クロヒカゲ、ヒメキマダラヒカゲ、ミドリヒョウモンなども飛んでいるが、もっぱらアザミやアキノキリンソウに群がるベニヒカゲだけを追い、カメラにもおさめる。さらに下りたところにバスの中から認めた草原があり、アザミ花上でアカタテハが求蜜している。



Aug.29,1977 長野湯の丸高原
ベニヒカゲ ♂

裏面

15 時のバスまでひたすらベニヒカゲと戯れる。雲が多くなると急にチョウの姿が減ってしまうため 15:14 のバスに変更してしま少しねばる。冬にはスキー場となるスロープにも霧が立ち込めてくるが、あえてその中に入り込むと羽を休めるベニヒカゲが見つかる。ここら一帯には黄斑型のメスが多い印象。個々の斑紋に微妙な違いがみられ、そういう視点でついつい捕獲数が増えて、結局新鮮個体を 20 頭も採ってしまうが、汚損個体もふくめてあたりにはまだまだ多数頭のベニヒカゲが乱舞しており、乱獲採集にはあたらないと自己弁護。ベニヒカゲは産地ごとの変異が多いチョウとして有名だが、蝶友の塩満さんにいただいた北海道日高産は後翅に全く紅紋がなく裏面もまるで表のよう



Aug.29,1977 長野湯の丸高原
ベニヒカゲ ♀

裏面



Aug.5,2007 北海道日高町
ベニヒカゲ ♂
leg. Y.Shiomitsu

裏面

(現在、ベニヒカゲは種指定の保護蝶となっていて長野・群馬県では採集が禁止されている)